



でんき

全作品と講評

www.columnland.net

落ちこんでないで、
でんき出せよ

切れそうなりモコン電池へ

みんなは、普段どんなメディアから情報を得ているだろうか？

俺は正しい情報を素早く手に入れる、所謂「情報強者」だと思ってる。テレビとか新聞は信用しない。やはり情報源としてはインターネット、ツイッターの方が偏見が含まれてなくて、信頼できる。

最近興味があるのは韓国問題だ。テレビでは韓流スターが人気と言われているが、実際そんなに人気があるとは思えない。

政府だってそうだ。日本固有の領土である竹島はいつの間にか韓国に占拠され、勝手に独島という名前をつけられていた。にもかかわらず日本は平和主義だからとかなんとか言って、全然韓国を追い出そうとしない。ますます友好的な関係を築いていくとさえ言っている。こんなおかしい話がどこにあるだろうか？

インターネットには真実が書いてある。それを見れば誰でも、即刻韓国人を日本から追い出すべきだと思うだろう。

自分は普段インターネットの掲示板「ちゃんねる」とかで活動している。韓国人には関わらないようにという注意喚起や、手に入れた情報の拡散をしている。

専用のソフトを使うと、関連した発言が全て見られる。最近では、パソコンはずつと起動させておいていろいろなスレッドや発言を取得していることが多い。

でも、俺のように正しい情報を発信しているところに反論してくる奴らもいる。どうせ韓国人だろう。正直、嘘の情報を流すなど「電気の無駄使い」だとか言いようがないから、早くインターネットをやめてほしいものだ。

さて、そろそろ彼女のところに行かないと。

本当はウチに来てもらってもいいんだけどね、なにぶん実家だし。

親は相変わらず、どこへ行くかの何時に帰るかの聞いてきて五月蠅い。もう大人なんだから大丈夫だってのに。

桜木町の駅前に着くと、もう彼女は待っていた。

急いで駆け寄る。

「ごめんね、待った？」

「そうでもないよ〜」

良かった。そんなに待たせてはいないようだ。

もう昼時である。良さそうな店をネットでチェックしておいたのでそっちに向かおう。

目的の店のテーブルに着く。

「最近なんかあった？」

「う〜ん、そうだ、この前バイトの友達と京都行ったんだ！」

「へえ〜金閣寺とか行ったの？」

「そうそう、歴史とか全然わかんないけど楽しかったよ〜」

他愛もない話が続く。こんな彼女がいて幸せだ。

料理が運ばれてきてもまだお喋りは続く。

「そうだ、テレビとか見る？最近韓流とか流行ってるよね〜」

あ、彼女までテレビに洗脳されてる。やつぱり彼女にはちゃんとした認識を持つて欲しいし、ここで韓国の真実を話してあげようか。

「それなんだけど、あんまりテレビとか信用しないほうがいいよ。韓国人が日本人を洗脳しようとしてテレビを利用してるしね」

「えっ？何のこと？」

彼女は全く知らない様子で言った。純粹なのは悪くないんだけどなあ…

「韓国はダメなんだよ、竹島を盗むし、日本の剣道とかのいろんな文化も韓国が起源というところに歴史を捏造してるんだ。もつと言うと韓国人の女つてさ、みんな整形手術してたりするし」

彼女はキョトンとした表情をしている。

やはり普段テレビしか見ていないと、衝撃的な事実に関こえたかもしれない。

「実は…」

彼女はなにか言いたげな様子でこちらを見ている。

何かあったんだろうか。

「私、韓国の国籍なの…」

「えっ？」

「……………」

「……………」

長い沈黙が続く。何か言わなければと思った刹那、彼女は静かに言った。

「あの、別に国籍の都合だけで、韓国で生まれた訳じゃないし、日本で育ってきたんだけど…」

「でも一応言っておいたほうが良いと思って…」

「ごめんね、私に何か悪いところがあるんだつたら言ってもらっていいからね…」

彼女が話し終わるや否や、前にマジックテープ式から切り替えた財布から一万円を取り出すと、そつとテーブルに置いて店を飛び出した。

ただ走った。逃げたかった。どこまでも。

暗い自宅の部屋の中。

つけっぱなしのパソコンの画面には、相変わらず掲示板の発言が流れていた――

イルミネーションの

そばに湧く**カップル**つて
何かに似てると思つたら
夏の街灯にたかる

蛾
だつ
!!!

「別に負け惜しみとかじゃないし」

「姉さん、辞書借してくれ」

そう言つて姉の部屋に入つたが姉はいなかった。

「おじやます…あとで伝えておこう」

誰もいない部屋に挨拶が響く。

姉の部屋にはちよくちよく借り物のために入っている。

いつ入つても姉を思わせる香りがしてくる。

僕にはとても耐え切れるとは思えない香りだ。

なので、早く辞書を借りて部屋を出ることにした。

「…前入つたときはたしかこの辺りだったはずなんだけど」

姉はなぜか多くの蔵書を持っているので、辞書一つ探すのも一苦労だ。

「あ、あつた。」

伝奇小説の横に探していた辞書はあつた。

僕が辞書に手を伸ばそうとしたその時、

「女の子の部屋に勝手に入るものじゃありませんよ」

「くっ」

困惑する僕をよそに声の主は僕を仰向けに倒すと何故か両手を縛つてきた。

「姉さんなにしてるんだよ」

もちろんこんな事するのは姉しくないない。

「もちろん無断で私の部屋に入つたお仕置き。それと、お遊びかな」

姉は話しかけながら猿轡をしてきた。このモードの姉はなに考えてるのかさっぱりわからん。

「最近本で読んだんだけど、今でも心が病んでしまうほど人を愛せるひとがいるのね。昔のお話ではよくあるんだけど、今でもそれだけの愛情を持っている人達がいるのね。」

姉はなにが言いたいのだろうか、意味わからん。

「それでね、可愛いあなたのことを心が病むほど愛したら、私はどうなってしまうのか知りたいの。まあ、実行するとしても許可を求めたりしないけどね。ところで、今日の夕飯は私の担当だったのだけど」

「……」

僕は体が熱くなつていくのを感じた。

なにか入れたのかを聞きたいが、猿轡でうまく言葉に出来ない。

「なに言っているのか分からないけど、入れたのは家族としての愛情に決まっているじゃない。さっきのはもうなんつものお遊びよ」

それを聞いて安心した僕は妙な緊張感から解き放たれた。

なんかいつもよりも気持ちこもっていた気がしたけども。

「力は抜けたようだけど、まだ体は熱いようね。お仕置きを期待しているのかしら？」
ちがう…と言おうとして全力では否定していない自分がいた。

「じゃあ、お仕置きを始めるわね」

そう言つて姉は僕の足を立ったまま両手で掴んで…

母「電気代、あんたが引越したら半額になったよ」

「お母さんごめんなさい」

十五代〇〇村長の伝記より

その男が村を訪れたのは村長が子供たちにものごとを教えているときだった。村で一番の賢者である村長の授業を妨害されて子供らは怒ったが、村長の一言で皆静かになった。子供たちは皆村長になついていたのだ。その男は一目で異国のものとわかった。“すうつ”なる衣装に身を包んでいたからだ。男は行商に來たといい、できれば皆の前で商品を披露したいと村長に頼みこんだ。村長はそれを許し、村中の人間が広場に集まった。

「さて、紳士淑女の皆様。本日は私めのためにお集まりくださり、真にありがとうございます。本日私がお持ちしたのは私どもの国で作られた素晴らしい製品の数々でございます。まずは……」男の洗練された言葉遣いに村人一同は感心し、そして男が見せるさまざまな商品に惹かれていった。

「続きましては携帯電話というものでございます。これは電波を飛ばして遠く離れた人と……」
「なあ、兄ちゃん」

と、そこで村の若者が男の話を遮った。

「さつきからいくつかわからねえ言葉があるんだが……。とりあえずその“でんぱ”ってのは何なんだい？」

すると男は“まくすうえる”だの“へるつ”だのと次々に知らない言葉を増やしながら説明を始めた。しかし男にとつては予想外だったのであるが、若者やその仲間が次々と質問を始めた。男は適当に切り上げるつもりだったのかもしれない。しかしもはや若者たちの絶え間ない質問を捌くのに精一杯になっていた。しばらくして、男はこう叫んで打ち切った。

「だから、つまり電気の力を使うんですよ！」

「電気の力とは、どういうものなのかね？」

と、ここで村長が口を開いた。それを見て好き勝手に喋っていた村人も一様に口をつぐんだ。

「ええつと……たとえば雷が落ちるのを見たことはありますね？それと同じものです。」「つまり、雷様の力を使うわけだね。どうやるんだい？」「それはこちらの発電機を機械に繋いで……」

「その箱の中に雷様がいるわけだ。」

そういうと、村長は村人に言った。

「この男は悪魔の手先だ！皆の衆、雷様をお救いしろ！」

号令とともに、村人たちはいっせいに男に襲いかかり、男を村の外に追い立てていった。そして、男のもつてきた物をすべて叩き壊し、雷様を解放してさしあげたのであった。

※訳者注

教訓…物事は少しずつ、相手のわかるところから伝えていきましよう。伝え方が悪いと、人は鬼にもなります。伝鬼、なんつって。

ひかれあうのに

近づきすぎると

互いに消えてしまう

かなしい運命

電「そろそろ俺たちが出る時期か……」

油「そうだな。」

電「まあ今年は俺が使われることは確かだけだな。」

油「それはどうかな？最近では電力不足が叫ばれてるしな。」

勝負は最後までわからん。」

電「それはないな。だってお前臭いじゃん。」

油「そ、それは……。でも俺のほうがお前より安いだろ。」

電「でもお前つき足しとかめんどいしな(笑)」

油「それより去年俺らが使われなかったことが気になってるんだけど……」

電「それな……」

……一方、押入れの外では……

「寒くなってきたからそろそろつけましようか、床暖房」

みえないからって きやすく さわるなよ！
さわったら いたい おしおき だからな！

初めてあなたと出会った時、一瞬私の導線をはじめの電流が走り抜けました。

それからあなたと出会う度、私の磁界は変わりました。

それが嬉しくて、あなたと会う時はいつも、私は電位が上がっていました。

そして、初めて会った時と同じように、導線を駆け巡る電流を感じていました。

私はつい最近、その電流の正体を知りました。

その時は恥ずかしくて、まるで抵抗からジュール熱が出てるみたいでした。

それからは、その電子は必死にコンデンサーの中に溜めてきました。

でも、もう電子を溜めるのも限界です。

私は、あなたに私のこの静電エネルギーを伝えたい。

放課後、実験室で待っています。

磁石さんへ RLC回路より

「おお。今日も寒いな。」

『はい、大王様。しかし我が国は原発の事故以降、国をあげて節電に取り組んでいる真つ最中ですから。』

「分かつている。暖房をあまり使えないと言うことだろう。だが、国内に電力不足の影響は出ていないのか」

『いえ、現在公共設備に対して甚大なる影響が出ております。普段は生ぬるい温度に調整してありますプールはこの寒さで冷え切っております。また、拷問用の電気いすは、節電のために拷問と言うよりマッサージいすになってしまいう有様です。』

「ふむ。この調子でいくとまだまだ被害は出そうだな。」

『はい。十分な電力の供給が急務となっております。そこで大王様、T国に依頼して、電力を分けてもらうというのはいかがでしょうか。』

「いや、それは避けたいな。あの国はがめついからな。ここで貸しを作ってしまうとまた移民の取り分を減らされてしまうだろう。どうしたものか……」

『そうですね……』

「大変です、大王様。ついに血のプールが凍結してしまいました。」

「うむう、もはややむを得ないか。仕方がない、今すぐT国に連絡を取れ。そして電力を分けてもらうように頼め。なんとしてみてもこの難局を乗り切るぞ！」

この日、株式会社天国電力により株式会社地獄電力に対して電力の融資が行われた。そしてこの日以降、死者の大半が天国へ行くことによる地獄の過疎化が社会問題となっている。

「停電だって」

ろうそくの 勇敢なあかりを
みんなで囲んでいよう。

白い吐息は 宙に浮かんで
寒さといっしょに消えてゆけ。

でんきが消えても あったかい。
そのあたたかさは
でんきとちがつて
人の心が原動力。

たぶんきつと そうだろう。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	切れそうなりモ コン電池へ	17 pt	1 位	1 sp
		あるある感満載の今週の滑り出し。 たしかに、「でんき出せよ」ですね。フォントもしつくりはまって表紙採用。その追い風を利して、首位まで駆け上がりました。おめでとうゴールド・メダル&今週のイチオシフリーズ大賞!!! 特別賞：もっと電気出せよ賞 from W班（落としたけれどもっと電気出して欲しいから） イチオシ「でんき出せよ」×3		
02	電気の無駄使い	0 pt	9 位	0 sp
		力作、入ります。 思い込んでいた「正義」が、大きなカベにぶちあたる瞬間まで、描写力ゆたかに描ききっていただきました。 呆然と脱力するラスト・シーンが、問題の大きさを伝えてくれます。タイトルもばしっと決まりましたね。 イチオシフリーズ：「所謂『情報強者』だと思ってる。」		
03	別に負け惜しみとかじゃないし	1 pt	6 位	0 sp
		そんな負け惜しみ。 フォントをころころ変えた工夫で、キーワードがくっきり見えて、賑やかな演出が成功しています。 イチオシフリーズ：「蛾だっ!!!」		
04	電気あんま	0 pt	9 位	4 sp
		姉と弟のキケンなプレイ。 シールだからって、この路線ばかり狙うなあああああああ！（先週に引き続いてのTA陣の魂の叫び。） ということで今週の最多特別賞です。おめ。 特別賞：divしちゃうで賞 from R班（僕は電子です） 今週のシールで賞 from S班（いかがわしいよお、ふええ） 名称知らなかった賞 from U班（アレをでんきあんまというとは知らなかったから） まだまだ甘いので賞 from Z班（エロくない）		
05	お母さんごめんなさい	0 pt	9 位	0 sp
		基本料とか考えたら、どんだけたくさん電気使ってたんだろ、アルミの精錬でもしてたんでしょ、とTAさんたち憶測をたくましくしてました。クーラーフル稼働ですか、そりゃ来るわ、なるほど。		
06	十五代〇〇村長の伝記より	1 pt	6 位	0 sp
		村長、ぜんぜんカシコくないじゃん！ いいのか伝記なんか収まってて！ とツッコミたくなる村の寓話。 すうつの男がかわいそ過ぎて泣けます。		
07	異種電荷	7 pt	4 位	0 sp
		「かなしい」をひらがなにすることで、しみじみかな		

		しさが迫ってきます。 ロマンティックな理系ネタでナイス・インパクト。 イチオシフレーズ：「かなしい運命」
08	ストーブたちの悲劇	1 pt6 位1 sp うまいうまい。どっちが勝つのかなあと考えていたら、突然の床暖房へ。そしてその熱源は、きっとソーラー、なのでありましょう。 特別賞：こたつ出しま賞 from T班（うちの班が考えたお題も出してください。）
09	せいでんき	7 pt4 位1 sp なつかしフォントがいい仕事してますねえ。 せいでんきくんのキャラがしっかり立って、むしろ逆にさわりたくなる親近感。 特別賞：おしおきされたで賞 from V班（フォントが好きだった）
10	磁石さんへRLC回路より	14 pt2 位2 sp 華麗なるルビ遣いで、見立てのおもしろさ全開。ふむふむ、コンデンサーって「こころ」なのか。 楽しくてためになる、とっても健全な（→ここ重要ポイント）よい子のかかくきょうしつでした。 作者ミスリードまで成功して、がははと高笑いの作者さんでした。おめでとうシルバー・メダル!! 特別賞：またおまえか賞 from Q班（おもしろい） 独断賞 from X班（まあ……ね） イチオシフレーズ：「コンデンサー（こころ）」「抵抗からジュール熱が出てる」
11	電力不足	0 pt9 位1 sp 天国地獄ネタ・リターンズ。 電気いすマッサージチェア化とか、血のプール凍りましたとか、小ネタが前回よりキレが良いですね。 地獄の過疎化問題ですか。楽しそうな設定なので、まだまだネタが続きそうです。 特別賞：自転車でも漕がせま賞 from Y班（地獄に堕ちたやつは発電させよう！） イチオシフレーズ：「拷問用の電気いすは、節電のために拷問と言うよりマッサージいすになってしまう有様です」「ついに血のプールがとうけつしてしまいました。」
12	停電だって	12 pt3 位0 sp 祈りのようなフレーズたち。 特に冒頭の「ろうそくの勇敢なあかり」という表現に魅せられました。 「たぶんきっと」。きれいなシメで今週の詠み納めです。 ふるさとは北海道、だそうな。おめでとうブロンズ・メダル！